

# 景観フォーラム

## 巻頭言

今、プーチンの頭の風景はどのような世界がよぎっていることであろうか。恐らく自分はロマノフ王朝の末裔であり、不幸にも非嫡出子として生まれてしまったために苦勞を強いられているのだ、といったところであろうか。1917年のいわゆる革命というものは時代が貶めた誤りであり、その後の社会主義という風景はあってはならない悪夢の果てであり、すべて夢であったのだ、と。そして1990年以降の何が何やら不可思議な資本主義社会という、すべてが騙しあいと無駄骨社会という風景はなんであったのか。この100年という時間はこのロシアという大地には全く無に等しい動向であったのだ。100年ほど前までその栄華を築いてきたロマノフ王朝こそが本来の求心力のあるロシア社会であり、この100年というものは単なる間違っただけの路線であったにすぎず、本来のロシアのあるべき道程に戻ればロシア社会は安定し繁栄するのだ。それこそが、ロシアという偉大なる国家のあるべき姿であり、子供のころから夢見てきた風景である、と頭をよぎったのはこのプーチンという哀れな男の夢であったろう。

さて、このようにプーチンの頭の中が動いているとするなら、ロシア住民よ、今のところロシアを見捨てなさい。変な疫病が蔓延していると考えたほうがましである。10年以内にはまともな指導者が出現して、この馬鹿なヒトラーにも劣る男はいなくなるはずである。狂気はそんなに長くは生きられる筈はない。おそらく良識ある市民はこのような狂気とはまともに付き合えないだろうし、少し時間をとって外部から観察してみたらどうだろうか。どちらにせよ、ロシアという大地からは離れたほうがいいと思う。ロシアの風土はなくなりはないのだから。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

## <日本景観フォーラム 2022 年度年間スケジュール>

\*2022 年度とは 2022 年 4 月 1 日⇒2023 年 3 月 31 日のことです。

### 2022 年

- 4月12日(火) 15:00 東京都訪問(神宮外苑再開発を問う)
- 4月19日(火) 16:00 オンライン会議 **第1回景観研究会**
- 5月20日(金) **第1回景観まちあるき**(神宮外苑・表参道)
- 6月21日(火) 16:30 オンライン会議 **第2回景観研究会 第1回理事会**
- 7月26日(火) 16:30 オンライン会議
- 8月20日(土) / 8月21日(日) **特別景観視察会**(斑尾高原)
- 8月30日(火) 16:30 オンライン会議 **第3回景観研究会**
- 9月24日(土) **第2回 景観まちあるき**(検討中)
- 10月25日(火) 16:30 オンライン会議 **第4回景観研究会**
- 11月26日(土) **第3回 景観まちあるき**(検討中)
- 12月20日(火) 忘年会

### 2023 年

- 1月28日(土) **第4回 景観まちあるき**(検討中)
- 2月21日(火) 16:30 オンライン会議 **第6回景観研究会 第2回理事会**
- 3月25日(土) **第5回 景観まちあるき**(検討中)

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

## 路面電車に乗って 1

豊村泰彦

北陸地方のほぼ中央にある富山県は立山連峰や黒部峡谷に代表される素晴らしい自然景観に恵まれているが、都市部にも古い街並が伝統産業とともに残されていて、都市景観でも魅力いっぱいの県である。とくにここは全国的でも希少となった路面電車が県内二都市で今も街の公共交通の一役を担って活躍しているのだ。二都市とは富山市とその北西部に位置する高岡市で、富山市のほうは現代の路面電車であるLRT(LightRailTransit=次世代路面電車)を日本で初めて導入し、新時代の公共交通網を実践している。それにつれまちの景観美化も進み、今や選んだ全国の中でも有数の美しい景観美を誇る都市として生まれ変わりつつある。一方の高岡市はまちの中心部を貫くメイン通りに路面電車が街の顔となって走り、その周囲に多くの歴史的建造物が残り、街の魅力を高めている。街景観として路面電車の果たす役割は極めて大きいのではと考え、二つの街の路面電車とその沿線上の景観スポットを紹介する。今回は富山市。



### 市電は富山市の顔

富山市の中心部を走る路面電車は「市電」と呼ばれ、通勤、通学、買い物など市民の貴重な足となっている。市電の路線は、富山駅を中心に南北に7路線あり、10~20分間隔で運行している。商業地区のある駅南側には南富山駅と富山大学前までを結ぶ2路線と市街の重要な拠点を巡回する環状線(右回り、左回り)がある。駅北側は岩瀬浜までの路線があるが、南側の路線ともつながっていて北から南、南から北へと乗り換えずに行けるのも便利である。また、市街を走る路面電車は、最新式の低床車両に交じりレトロ車両もゆったり走っている。このように市街の中心部を路面電車が縦横に走る街は今日では希少な存在である。



### 路面電車とは

そもそも路面電車が日本で走ようになったのは1895年(明治28年)で、日本初の路面電車は京都市街だった。その後名古屋や大阪といった大都市を中心に路面電車が開通し、明治から大正にかけ、日本全国に路面電車が広がっていった。ところが戦後の高度成長期に入ると自家用車の急増などによって道路には自動車があふれ、路面電車の運行が難しくなり、さらに、バスや鉄道の整備により利用者数も減少し、路面電車は街から次々と姿を消していった。その結果として、ピーク時には67の都市で運行されていた路面電車が、現在では17都市にまで減少している。



### LRTの導入

数を減らしていった路面電車も、1990年代に入ると再び脚光を浴びることになる。自動車の普及による大気汚染や道路渋滞などの都市問題が注目され始め、その解決策として環境に優しい乗り物としての路面電車にスポットが当たったのである。

現在、路面電車は低床式の次世代型路面電車「LRT」が、各地で導入が検討されている。富山市が中心部で路面電車の「LRT」化に踏み切ったのは、北陸新幹線の開業に伴って、街の回遊機能を高めることや利便性の促進、コンパクトなまちづくりを目指すことを目標に掲げたことによる。



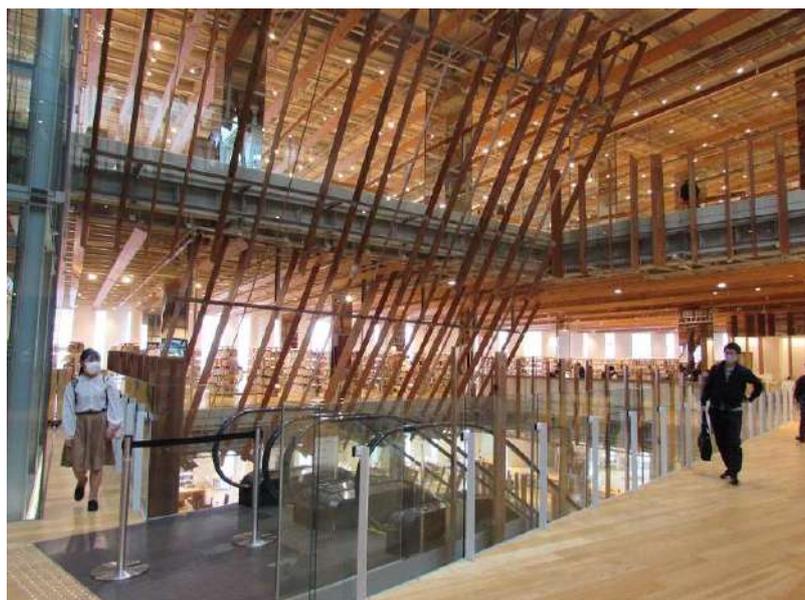
#### 路面電車と景観

路面電車が走る街は景観が良いと感じるのはおそらく自分だけではないであろう。それは路面電車の存在が都市景観として邪魔なものではなく街の美的要素として自然に溶け込んでいるからではないだろうか。一方の車はどうか。現在の街の中心部の街路で一番視界を占めているのは自動車であるが、車は、数が多いことで街が良く見えるとか、街の魅力度がアップしたという話は聞いたことがない。しかしそれに対して路面電車は1台でも走っていると、一気に都会の雰囲気盛り上がる。路面電車と街の景観が交錯する景色は極上の都市景観といっていよう。路面電車に乗ると、今度は道路の内側から街の景色を眺めることができる。しかも考え事しながら流れる街の景色を眺められる。路面電車は速度が最大でも40kmと遅いので、周囲の景色は自然と目に入る。脳の疲れをとるのにも非常に良いのである。一方、車は郊外では力を発揮するものの中心市街地では邪魔になることが多い。富山県が目指すのは都市の中心部からできるだけ車を排除し、公共交通を中心としたあたらしい都市交通システムを構築することであろう。それには人を呼び込めるような魅力的な中心市街地にする必要がある。その点でも路面電車は都市問題を解決する有力な鍵を握っているといえるだろう。



### 市電に乗った

市電の環状線の内回りに乗り、富山城址公園過ぎたあたりにガラスやアルミなど反射する素材を張り付けた施設の前で下車した。ここはガラス工芸、ガラス美術の拠点となる富山市ガラス美術館である。名称からしてガラス美術を展示する専用のミュージアムかと思ったら一般図書から美術関連図書まで約45万冊の蔵書数を誇る図書館やカフェも併設する複合施設だった。シルバーな外観に対して、内部は天井から床から壁から羽板を張り巡らせた大胆な空間づくりである。ただ、大量の羽板がまるで光線のように降りかかってくるような装飾は圧迫感があり、感覚的にはプラスの効果ばかりではない。図書館としてはもっと落ち着いたデザインのほうが望ましいと思うが、木材に富山県産を使用していることを敢えて謳っていることからしても、設計者はまず木材を使うことにこだわったのだろう。設計はやはり有名なKさんであった。



岩瀬までの鉄道路線

富山市の市電路線をすべて乗りつくすには最低4路線は始点から終点まで乗り通さなければならないが、南富山までの路線の一部を除いて、ほぼ全路線市電に乗車した。全国にある市電のなかでもこの市電の凄いところは、新幹線や幹線鉄道が入る鉄道駅を横切って南北にまたがって路線が伸びていて、北は富山港近くの岩瀬というところまで直通で行けることだ。



#### JRの軌道を連結

富山駅から北に延びる市電の路線の大半は、かつてのJR富山港線だった。富山駅は北陸新幹線開設に伴って高架化されることになったが、JR西日本は、富山港線の高架化は採算に合わないとして廃止を打ち出した。このとき、富山市は北陸本線から分岐する約700メートル以外の路線を引き継ぐことを決め、第三セクターの富山ライトレールを立ちあげ、廃止区間の軌道を路面電車の路線にした。富山駅の高架化が完成した際には、市電とつなげて、富山駅南側の繁華街に直結した。その結果、市電は飛躍的に利用を増やし、年間160万人以上の利用者を獲得しているのである。

#### 岩瀬の古い町並み

終点の岩瀬浜駅を降りて、昭和初期につくられたという運河にかかる岩瀬橋を渡り、運河に沿って富山港の方角に歩く。富山港は神通川と並行する運河にあり、岩瀬の古い街並みは港から一本中に入った通りにしている。岩瀬は江戸時代に北前船や米、木材を大阪や江戸に運ぶ中継地として栄えた町で、江戸時代の建物が立ち並ぶ。中には江戸初期と思われる大きな建物も現存し、当時の雰囲気を残している。



### 旧馬場家

通りには内部を見学できる建物やカフェとして開放しているところもあるが、中でも旧馬場家は、江戸後期から活躍した北前船の廻船問屋だったところで、明治時代には汽船経営に舵を切り、近代的な海運業者として隆盛を保った。建物は江戸時代の形を残す町家建築だが、明治期に洋風建築を取り入れながら改修されたところもあり、お洒落な雰囲気も感じる。特徴的なのは長さ30メートルの土間通路に天窗から光を取り入れる工夫や、ところどころにモダンな装飾のあるのも、時代の流行を取り入れている証拠であろう。



### 森家

馬場家の隣には同じく北前船廻船問屋の森家がある。こちらは江戸時代以来の町屋建築の構造を引き継ぎ明治初期に建てられた建物で、国指定重要文化財になっている。囲炉裏が切られた一番広い座敷の天井は、吹き抜けの木組の梁が見事だ。また、表から裏にかけて通り庭が設えており、突き当たりに大きな土蔵が見られる。



岩瀬地区を河口とする神通川と並行する運河は富山市内に達しているが、富山駅北側すぐのところにある運河が親水公園として整備され富山市民に親しまれている。そこでは南側とは対照的に運河を中心に自然を生かした近代的で都会的な新しい都市開発が進められている。岩瀬のような土蔵や廻船問屋が立ち並ぶ歴史的な街並みと近未来の富山駅北側開発、現在、過去、未来をわずか30分で駆け抜けるのも富山の市電の魅力の一つである。



!!

## 伏見の景観

丹羽讓治

「街道紀行別巻街並み紀行(上)(下)」毎日新聞社刊は、30年前に出版された本で、街並みとして存続しているか定かでない。統一された建築様式と素材が生み出す景観は心地よい。

瓦、茅葺き、板葺きと屋根の素材は様々だが、起伏のある町や街を一望できる小高い丘に登れば屋根は景観の重要な要素である。

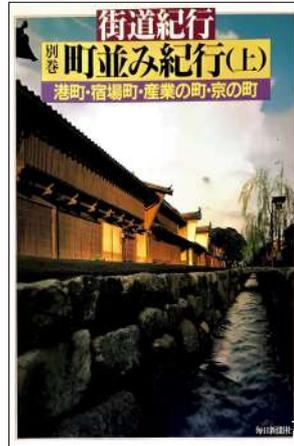
6月の会議で日本景観フォーラムの今年のテーマが「屋根」と定められた。近代以降、日本では「屋根」が軽視され、戸建て住宅に始まり集合住宅は勿論ビルに至っては稀にしか見られない。

3月27日、日本酒で有名な伏見を訪れた。桜が咲きごろで午後4時の日差しが白壁をより一層美しく照らした。伏見は2016年の12月31日にも訪問しており、宇治川派流沿いの酒蔵周辺の景観が美しい。川の両側に散策路があり、花も楽しみ春から秋にかけて小舟で巡ることができる。

同じ会社の建物はデザインが統一されているが、建物ごとに意匠は異なっている。瓦屋根、漆喰壁と板壁で構成し、同じ材料を使う事で一定の景観を保っている。電柱・電線と街灯が景観を損なっていたのが残念だった。電柱・電線は地中化を計り、街灯はオリジナルで製作が難しいのであれば、変にあわせたデザインのものを選択するよりは、モダンな意匠を選ぶ方が良いと思う。ポンペイ遺跡のサインは、断面が楕円の柱状でグレーのものだった。景観を壊しているという感じはしなかった。その時代になかった物は素材を変えて素直な形状の方が景観に好ましいと思う。

ファサードにアルミを使用している建物があった。塗装しているので、一見判らないが、近づいてみるとツルツとした感じが金属である。保存・修復では許されないが、見る限り最低限のラインかもしれない。

最後に、景観を支えている細部のデザインを堪能して頂きたい。



江戸東京たてもの園-綱島家



宇治川派流の両側に散策路



宇治川派流を小舟で巡る。縄文住居

!!



板壁を縁取る破風と漆喰壁



水面に映る建物



月桂冠大倉記念館



街灯が景観を壊す



塀と建築が同じ意匠



交差点を引き締める



リズムカルな窓・庇



電柱・電線が景観を壊す



急勾配の屋根、漆喰壁と板壁の対比



アルミサッシでも違和感がない



黄桜記念館



深い赤で飲食店を演出



連続した切妻屋根



むくりの無い屋根、有る屋根



板壁に漆喰の縁取り



坂本龍馬ゆかりの池田屋



窓にあわせて庇を変える



格子と寝犬矢来



デザインされた縦樋



外壁と一体化した扉2

## 浜松町・竹芝エリアの変容

尾崎孝行

都会の喧噪を忘れて豊かな自然に触れられる浜離宮恩賜庭園や旧芝離宮恩賜庭園を横目に、2020（令和2）年、相次いでオープンした「WATERS takeshiba（ウォーターズ竹芝）」、「東京ポートシティ竹芝」。

その昔、徳川家菩提寺である増上寺の門前町として賑わいを見せていた浜松町・竹芝エリアの大規模再開発・高度情報化の波が押し寄せている。

浜松町・竹芝エリアは2020年に策定された「スマート東京実施戦略」の先行実施エリアとして設定されている。その取り組みはデジタルを通じて都民の生活の質向上と、5Gや先端技術を活用した分野横断的なサービスの都市実装を重点的に推進する。

まずはこのエリアの歴史を紐解いてみたい。

古地図を見ると増上寺を中心に寺社や大名屋敷が立ち並び、その合間に町人地が点在する、さまざまな身分階級の人々が暮らす街であったことがうかがえる。このエリアは約400年前、徳川家が江戸に入府した際に、江戸城周辺の城下町としてかたちづくられた。しかし、明暦の大火（1657年）により、江戸城周辺の大部分が焼失。

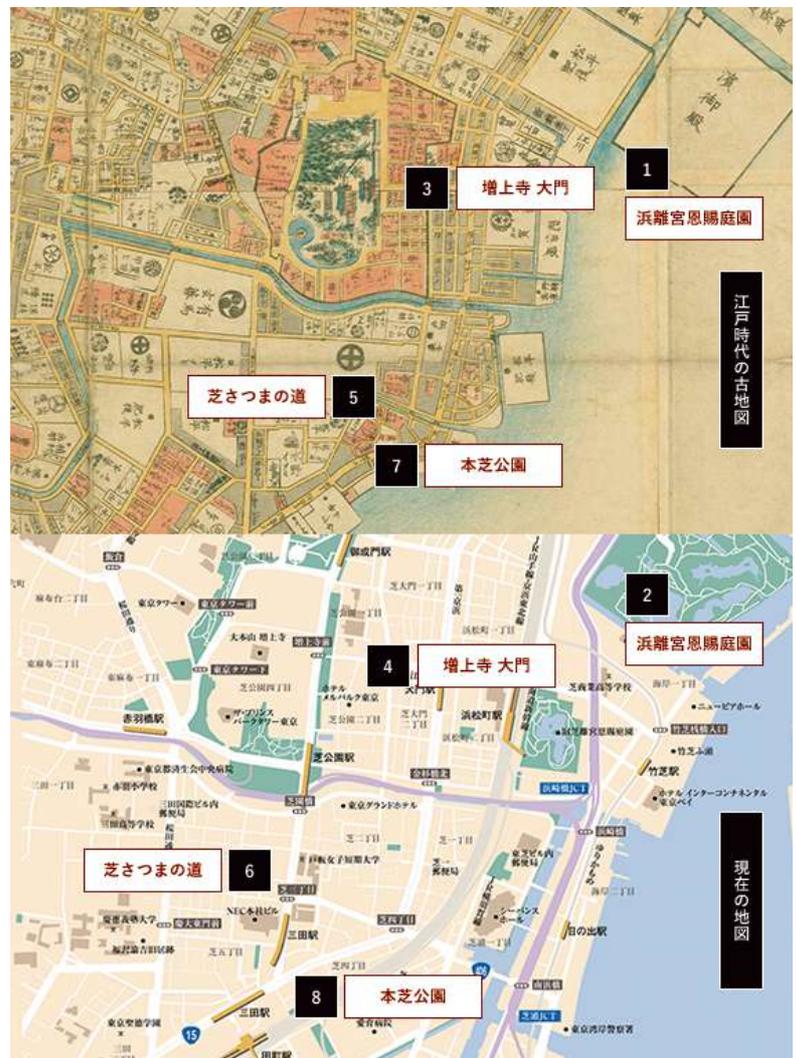
浜松町・田町の郊外のエリアに都市は拡大され、大名屋敷が多く立ち並ぶようになる。

さらに、町人が大名や家臣たちの生活を支える飲食店や服屋などを営み、都市機能は充実していった。

古地図と現在の地図を見比べたときに、その違いがよくわかるのは海岸線である。

現在、山手線が走る東側は本芝公園を含む一帯も含めかつては海に面しており、雑魚場と呼ばれる魚市場があった。

古典落語『芝浜』の舞台でもあり、漁師たちはここで漁業を行っていた。



しかし、1853年の黒船来航を契機に海岸線の防備が必要になり、台場をつくるなど整備がはじまる。明治時代に入ると堤防がつくられ、海の上を鉄道が走っていたという。大正時代以降、埋め立てが進み、戦後の高度経済成長期に更に拡大、現在の海岸線をかたちづくった。雑魚場は昭和45年に埋め立て工事が行われ、本芝公園に姿を変えた。公園としては珍しい細長いかたちは雑魚場であったことの名残である。

昭和に入り 1958 年～1970 年にかけて、東京タワー、首都高速道路、東海道新幹線、モノレールの開業、当時の国内最高の高さを誇った世界貿易センタービルの建設などが進み、当時の浜松町が日本の最先端として開発が進んでいたことがうかがえる。

平成に入ると竹芝エリアの貨物線は全廃され、貨物線跡地の一部を活用し東京湾岸を結ぶ「ゆりかもめ」が 1995 年に開業した。



緑部分は浜松町駅

水色の枠部分は「WATERS takeshiba」

## WATERS takeshiba

2020 年にオープンしたばかりのウォータース竹芝は、「アトレ竹芝」・「JR 東日本四季劇場 [春] [秋]、自由劇場」・「メズム東京、オートグラフ コレクション」で構成される複合施設。

JR、東京モノレール浜松町駅、ゆりかもめ竹芝駅から徒歩圏内にあり、東京駅、品川駅、羽田空港へのアクセスも充実しており、都心にありながら水辺に開かれたエリアにある。また、整備された船着場からは浅草、両国、お台場、葛西等を結ぶ水上バスが定期運航されるなど、地域の魅力を活かしたまちづくりがなされている。

WATERS takeshiba には環境再生や環境学習の場として 2020 年 7 月に誕生した「竹芝干潟」がある。干潟環境をより自然に近い状態に保つため、通常時はクローズしているが、月に 1 度、毎月第 2 日曜日に「オープンデイ」として誰でも入れる開放日を設けている。



## 東京ポートシティ竹芝

竹芝エリアで2020年9月に開業した「東京ポートシティ竹芝」は地上40階建ての高層ビルで、自然が持つ多様な機能を社会基盤に活用する「グリーンインフラ」を取り入れている。東京ポートシティ竹芝は建物全体がグリーンインフラとなっており、夏場に多発する豪雨や都市型洪水の対策など都市部に不可欠な機能を備えている。生物多様性の向上や地球温暖化にも貢献しており、都市部のグリーンインフラとして期待されている。

2階～6階のテラスに植えられた木々により、低層部は緑の丘のように見える。緑地は1700平方メートルあり、庭園に生息する鳥やチョウの飛来も確認され生物多様性への貢献が期待されている。また、テラスに盛られた土と植物の根によって600立方メートルの雨水を蓄えることができ、地下にも800立方メートルの水槽があり、ビル全体では1400立方メートル貯水できる。この量は法制度で要求されている規模の2倍である。他にも植物の木影や蒸発する水が涼しさをもたらすクールスポットの効果があり、都市部の気温が異常上昇するヒートアイランド現象を和らげることができる。



建物全体ではデジタル×コンテンツを軸に、人、情報、ビジネスをつなぎ、職住近接による新たなスタイルの都市となり、同時に世界を代表する国際ビジネス拠点となることを目指している。

これについては次の号としたい。

## 参考

過去が連綿と受け継がれる歴史に彩られた街 | 東京感動線

<https://www.jreast.co.jp/tokynomovingground/contents/town/054.html>

ウォーターズ竹芝

<https://waters-takeshiba.jp>

超高層の「グリーンインフラ」。東京ポートシティ竹芝のここがスゴい！

<https://newsswitch.jp/p/27749>

## &lt;LFJブックレビュー 77&gt;

『レオナルド・ダ・ヴィンチ』W・アイザックソン著 土方奈美訳

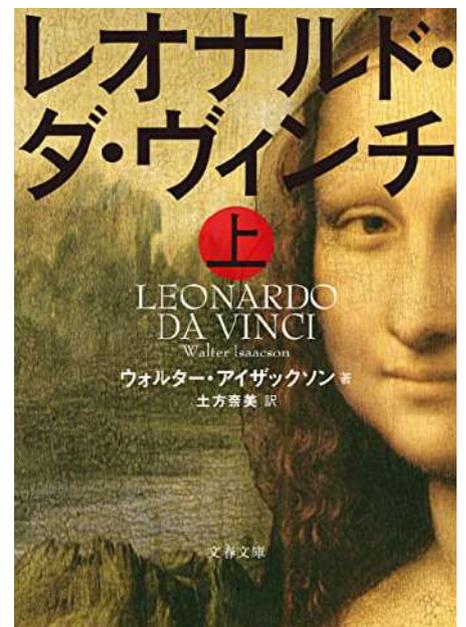
2019年3月刊 文藝春秋

斉藤全彦

レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は何者であるかと問われれば、普通よく聞かれる答えは、かの世界でもっとも有名な絵画「モナリザ」の作者であるというところであろうか。ところが、その生涯と業績を綿密に調べ上げた著者に言わせると「創造的天才の常として、レオナルドには観察と空想を難なく結びつける能力があり、それが“見えているもの”と“見えていないもの”とを結びつける思いがけない発想につながった」という。従って「作品を粛々と仕上げることより、ゼロから一を生み出す挑戦のほうを好んだ」ということになる。このことは、レオナルドの絵画作品に未完成作品が何故多いかが裏付けられる。著者は、レオナルドがいかに多彩かつ豊富な天才、否、真の創造的天才であったかを証明してみせるのである。

レオナルドは1452年、フィレンツェ近郊のヴィンチ村に生まれる。時代はルネサンスの最盛期であり、ご当地であった。父は公証人の家系という立派な一族ではあったが、母はヴィンチ村に住む親のいない貧しい16歳の娘であったという。非嫡出子として生を享けたレオナルドにとって運命は笑いかけた。彼に自由と偉大なる才能を授けたということである。もっとも、浩瀚な著書『イタリア・ルネサンスの文化』を著したブルクハルトに言わせると、当時非嫡出子として生を受けるということは社会的恥ではなかったという。そして、正式な教育を受けなかったことはレオナルドにとってはそれが仇にはならず諸々の発想の自由さを与えるという有利さに発展させることができた。著者はレオナルドを序章「絵も描けます」ということから始め、いかに彼が万能の科学者であるかを証明してゆく。確かに、才能ある画家として出発するが、生まれながらに経験主義者であったレオナルドが科学的探究にのめり込むことは必定であった。彼の描いた絵画のほとんどにその探求の痕跡を見つけることは容易である。科学的探究の証明が彼の絵画であったと言い換えてもいいかもしれない。これらの裏付けとして、いかに彼が独学の達人であったかを証明すべきであるかもしれない。30台にして知の共通言語であったラテン語に取り組み、当時活版印刷が始まった恩恵を受け、軍事・農業・音楽・幾何学などの膨大な書物からその知識を独学で紡ぎだした。レオナルド・ダ・ヴィンチは天才であるとともに大変な努力家であったことを忘れてはならない。

さて、このレオナルド・ダ・ヴィンチ論が素晴らしいのは、レオナルドが徹底して経験主義者であり、“観察”をすべての根底に持ち続けた人物であったことを証明しているところである。「モナリザ」という作品一つとってもその筋肉と神経との関連を見逃してはいない。では、有名中の有名な作品「最後の晩餐」を描いたレオナルドにとって神とは何であったのかという問いには著者アイザックソンは答えていない。レオナルドはまさしくルネサンス初期の申し子であった故と言ってもいいかもしれないが、徹底した経験主義を貫いた彼が、神とは何かと問うわけではない。しかし、その問いかけは証拠としては残っていないかもしれないが、存在と時間観念は心の奥底に持っていたに違いない。それは絵画が証明しているではないか。（斉藤全彦）



〒150-0031  
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502  
TEL : 03(3780)3814  
FAX : 03(6379)6681  
E-mail : [info@keikan-forum.com](mailto:info@keikan-forum.com)  
URL : <https://www.keikan-forum.org>

